第４回ＩＴ教育支援協議会フォーラム基調講演
「ｅラーニングにおけるインストラクショナルデザイン」

岩手県立大学ソフトウェア情報学部　鈴木克明
ksuzuki@iwate-pu.ac.jp

インストラクショナルデザイン（Instructional Design：以下ＩＤ)とは、教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスのことを指す。日本では、2000 年頃からの e ラーニング浸透とともに注目を集めるようになった用語であるが、それ以前から欧米では教育工学の中心的概念として広く用いられてきた。これほど急速にＩＤが注目を集めている理由に、「やってがっかりｅラーニング問題」がある。大学では教育機能の強化や１８歳人口の減少に対する社会人学生獲得のための方策として、また、情報化に投資したインフラ活用策としてｅラーニングに対する期待は大きい。「この種の問題を専門的に扱う学問領域」として、ＩＤに注目が集まっている。

教育の効果を高めるためには、誰に対してどんな目標達成のための教育を実施するのかを明確にする。教育のいわば出入口を明確にするギャップ分析と、目標を定めてその到達度を確かめるための評価方法を設定・公表することを重視する。教育活動は「学びを支援する」ための環境を整えることなので、学習心理学から教育手法を導き出す。行動主義から認知主義、構成主義とＩＤモデルが依拠する心理学理論も時代とともに拡大している。

教育活動の効率化とは、コスト効果（対費用効果）を高めることを指す。システム的アプローチを援用して、着実にステップを踏んで良いものを実現する手法（ＡＤＤＩＥモデル：分析・設計・開発・実施・評価の頭文字をとったＩＤプロセスの一般形）や、ラピッドプロトタイピング手法の応用により開発期間を短縮する工夫もある。また、制作者自らが開発途上で利用者に試用させる過程で教材の完成度を高めていく手法が、形成的評価として確立している。

教育活動の魅力とは、「またやってみたい」と思う気持ちを持たせることを指す。つまり、学習意欲が継続することである。ＩＤモデルでは、ケラーのＡＲＣＳ動機づけモデルが、関連諸理論を４要因に分類し、方略を過不足なく盛り込む手法として広く知られている。

欧米においてＩＤは、関連諸科学の知見を取り入れ、すぐれた教育実践から応用可能な設計原理を抽出して発展してきた。教育活動に有効な理論と教育実践とをつなぐ橋渡しの役割を担ってきた。一方、わが国では一時期欧米流のＩＤが注目されたことがあったが、その後の教育実践を支える理論的基盤として定着しなかった。その理由としては、高等教育における教育専門職の未確立、教育専門職養成課程の未整備、職人芸的伝承の重視と科学的発想への抵抗感、学習結果よりも結果に至る過程（プロセス）重視などがある。

ＩＤ専門家の養成を目指す大学・大学院教育やＩＤ専門家認定制度の確立・拡充によって、わが国のｅラーニングの発展を支える教育専門職を確保することが期待される。